

ARAISHITA SITE

新井下遺跡

—「北部中学校」改築工事に係る造
成工事に伴う遺跡発掘調査報告書—

1996年3月

茅野市教育委員会

ARAISHITA SITE

新井下遺跡

—「北部中学校」改築工事に係る造
成工事に伴う遺跡発掘調査報告書—

1996年3月

茅野市教育委員会

はじめに

茅野市は国特別史跡尖石遺跡、国史跡上ノ段遺跡を始めとする数多くの縄文時代遺跡がある縄文文化の宝庫です。ここに報告する新井下遺跡は、この茅野市にある縄文時代から平安時代にかけての遺跡です。

本遺跡が位置する湖東地区では平成4年度に調査された縄文時代の大集落「中ッ原遺跡」が早くから知られていましたが、新井下遺跡も大正時代に信濃教育会諏訪部会から発行された『諏訪史第一巻』の先史時代遺物発見地名表に記載されています。

昭和33年、北部中学校の新築工事に伴い、宮坂英式氏らによって一部調査が行われましたが、遺跡の大半はその造成工事で消滅したとされました。

しかし、平成5年に北部中学校の東側に湖東保育園が移転新築されることになり、それに伴って遺跡の緊急発掘調査を実施したところ、縄文時代の住居址35軒、平安時代の住居址5軒など多くの遺構が確認され、この新井下遺跡が予想以上に大きな遺跡であることが分かりました。

この様な経過を踏まえ、北部中学校の敷地内にも造成からまぬがれ、遺跡が残っている可能性があると考え、昨年度には国庫および県費の補助を受け、試掘調査を実施しました。

その試掘調査の結果、造成によって削りとられてしまった箇所はあるものの、周辺部には住居址が1軒発見されるなど、かなりの範囲にわたって遺跡が残されている可能性の高いことが分かりました。この調査結果に基づいて、造成の計画を作成していましたが、残念ながら、一部については削りとらざるを得ない状況となりました。

その調査結果をまとめたのが、本報告書です。本書が考古学、さらに地域研究の一助になれば幸いです。

最後になりましたが発掘調査にご協力いただいた北部中学校関係者、造成工事に携わった両角建設株式会社、調査に参加された皆さんに厚くお礼を申し上げる次第であります。

平成8年3月

茅野市教育委員会

教育長 両角 徹郎

例言・凡例

1. 本書は、茅野市立北部中学校改築工事に係る造成工事に伴い、茅野市教育委員会文化財調査室が実施した「長野県茅野市湖東新井下遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、茅野市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は平成7年7月3日から9月1日まで実施し、出土品の整理及び報告書の作成は平成7年12月1日から平成8年3月20日まで茅野市文化財調査室において行った。
4. 本報告に係る出土品、諸記録は茅野市文化財調査室に収蔵・保管している。

調査の体制

調査主体者	両角昭二（教育長）	平成7年9月まで
	両角徹郎（教育長）	平成7年10月から
事務局	宮下安雄（教育次長）	
文化財調査室	両角英行（室長）	鶴舎幸雄（係長）
	守矢昌文	小林深志（兼）
	小池岳史	大谷勝己
	功刀 司	柳川英司
	百瀬一郎	大月三千代
調査担当	小林深志（尖石考古館学芸員）	
(発掘調査・整理作業協力者)		
	伊藤千代美	占部 美恵
		田中慎太郎（以上調査補助員）
	伊藤京子	岡 和宣
		小平ツギ
		原 ちよ子
	白瀬スエ子	小平 長茂
	武田ケサ子	柳平 年子
	花岡照友	立岩貴江子
		長田 真
		北原きよゑ
		小平 千恵子
	日黒 恵子	吉田 肇子
		太田 友子

目 次

序文	
例言・凡例	
目次	
第Ⅰ章 調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 調査の方法と経過	1
第Ⅱ章 遺構と遺物	7
第1節 織文時代	7
第2節 平安時代	20
第Ⅲ章 まとめ	22
図版	
報告書抄録	

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 発掘調査に至る経過

今回、北部中学校が改築されることになった。かつての造成工事により遺跡はほぼ壊滅したと考えられており、新井下遺跡であるが、造成工事の方法によっては、縁辺部で遺跡の残っている可能性があること等を考慮し、昨年度、範囲確認をかねて試掘調査を行った。

試掘調査の結果、校舎敷地の東側から中央にかけては造成工事により破壊され、遺跡は残っていないことが確認されたが、西側から北側にかけては縁辺部に包含層が残っていることが確認された。特に北側では住居址や集石などの遺構も検出され、昨年度に調査した湖東保育園の敷地から続く大きな遺跡の一部であることが確認されている。

この結果をもとに、造成工事の設計に反映してもらうべく保護協議を行ってきたが、北側部分で、どうしても削平せねばならない箇所がでてきたため、やむを得ず、本年度発掘調査を行うことになった。

調査対象となったのは、遺跡の北側斜面にあたる約900m²である。

第2節 調査の方法と経過

調査は7月3日から開始した。調査区の西から重機を用いて表土層を剥ぎ取っていったが、北部中学校の旧校舎を建設する際の造成により、1.5m近い盛土があり、さらにその下に旧表土層があるため、2m近い土砂を取り除く作業となった。

重機による表土層の剥ぎ取りは、7月の長雨により、なかなかかはからず、予定範囲のすべてを終了したのは7月27日である。

その間、西側の表土層の剥ぎ取りを終了したところから、遺構の検出作業を行っていった。調査予定範囲の北側には、東西に走る道路があり、その下に使用中の水道管が敷設されていたため、残さざるを得なかつた。そのため、猛暑の中、四方を塀に囲まれたような状態での作業となつた。

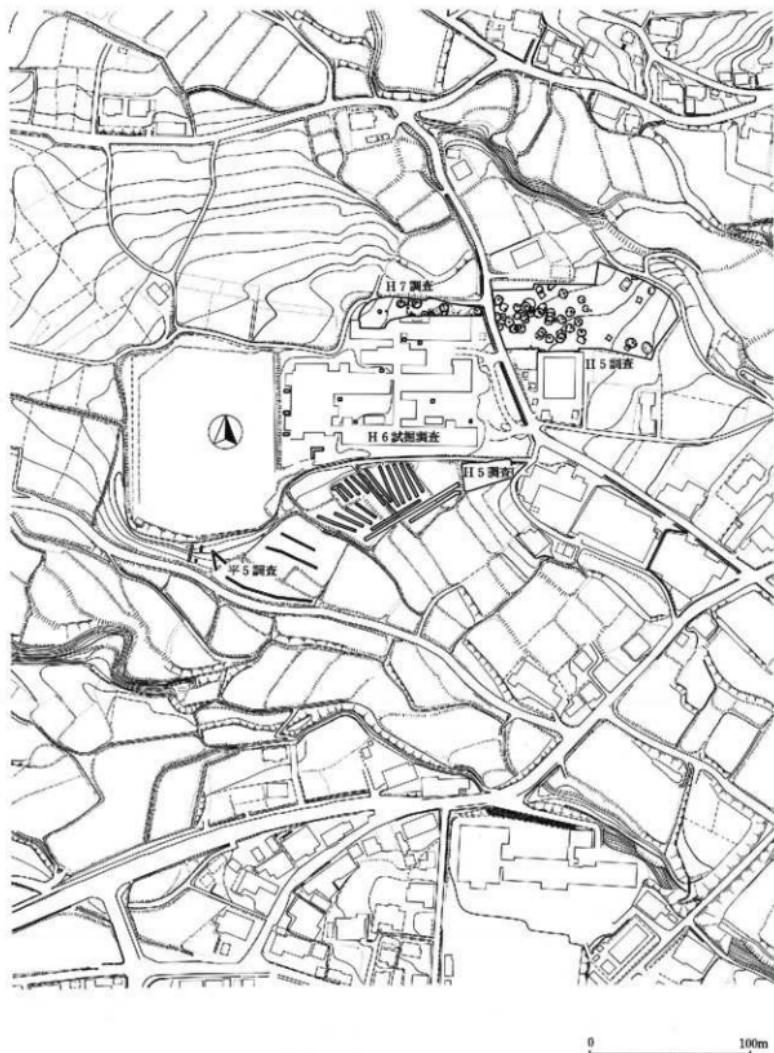
調査区の西側は、遺物の出土も少なかったが、調査が東に進むにしたがつて、表土層中にも多くの遺物を包含するようになった。そのため、ローム面よりかなり上層で表土剥ぎを止め、手作業で掘り下げを行い、遺構の検出をした。また、旧校舎の基礎工事が、かなり下まで及んでおり、作業を困難にした。

縄文時代中期の住居址はローム層を掘り込んで検出されたため、遺構の検出は容易であった。しかし、縄文時代後期の住居址は、ローム層まで掘り込みが至っておらず、埋甕炉が黒色土中で検出されて、初めてその存在が確認されたり、柱穴が回っていることから住居址の存在を推測せざるを得ないなど、検出は容易ではなかった。さらに東では、平安時代の住居址が上層で確認され、それと重複する形で縄文時代の住居址が存在していたため、調査に手間取つた。

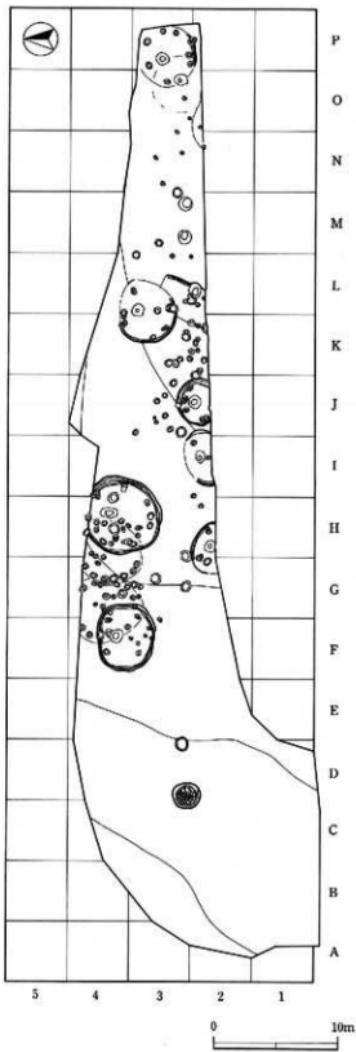
調査は前半の長雨にたたられながらも、ほぼ予定通り、終了することができた。



第1図 遺跡の位置 (1/25,000)



第2図 周辺の遺跡と調査区の位置 (1/3,000)



第3図 遺跡分布図 (1/400)

調査日誌抄

7月3日（月）曇り後雨

本日より、重機による表土剥ぎ作業に入る。表土剥ぎは西側より行う。とりあえず、旧校舎の造成時に盛った土だけを剥ぎ、その後、旧表土を取り除くこととする。

7月10日（月）晴れ

重機による表土剥ぎ作業。

7月11日（火）晴れ後雨

重機による表土剥ぎ作業。

機材の搬入を行う。

雨のため、午前中で作業を中止する。

7月13日（木）曇り

重機による表土剥ぎ作業。

西側より、遺構確認作業に入る。

7月18日（火）曇り

重機による表土剥ぎ作業。

遺構の検出作業を行う。径2m程の掘り込みを検出する。確認面での土器の出土も多い。

7月19日（水）晴れ

表土剥ぎと、遺構検出を引き続いだ。

住居址になると考えられる掘り込みは、4軒ほどとなる。他にロームブロックを多く含む土坑も幾つか検出されている。

7月24日（月）晴れ

遺構検出作業。

7月27日（木）晴れ

重機による表土剥ぎが終了する。

7月31日（月）晴れ

遺構検出作業。

8月1日（火）晴れ

遺構検出作業。

8月2日（水）晴れ後曇り

遺構検出作業。

平安時代住居址（1号住居址）の掘り下げ開始。

基準杭測量開始。

8月4日（金）晴れ

縄文時代の住居址の掘り下げに入る。縄文時代の住居址は西から番号を付けていくこととする。

8月7日（月）晴れ

1号住居址をほぼ完掘する。

2号住居址の掘り下げと、遺物の取上げ作業。

1号小豊穴の掘り下げと、遺物の取上げ作業。

1号土坑の掘り下げと、遺物の取上げ作業。

8月8日（火）晴れ

1号小豊穴は、床面に平石を敷き詰めてある。

2号住居址の掘り下げと、遺物の取上げを繰り返す。

3号住居址の掘り下げを開始する。この住居址は、昨年度行った試掘調査で検出されていた住居址である。

8月9日（水）晴れ

1号小豊穴の掘り下げ。

1号土坑の掘り下げ。

7号住居址の掘り下げを開始する。柱穴は2本ずつ重複しており、新旧関係がある。内側の柱穴の方が新しい。

8月10日（木）曇り

1号小豊穴の平面図作成。

2号住居址の土層断面図の作成。遺物の取上げ作業。

3号住居址は完掘する。

8月11日（金）晴れ

1号小豊穴の平面図作成中に、中央から埋甕が検出され、写真撮影を行う。

7号住居址の平面図作成。

3号住居址の掘り下げ。

1号土坑の完掘写真を撮影。

8月14日（月）晴れ

1号小豊穴の断面図を作成する。

1号住居址の遺物取上げ。

2号住居址の掘り下げ。

3号住居址の土層断面図の作成。

- 4号住居址は、かくを残し掘り下げを終了する。
- 5号住居址の掘り下げ開始。
- 8月15日（火）晴れ
- 1号小豎穴の写真撮影を再度行う。
- 2号住居址の掘り下げ。
- 1号住居址の遺物取上げ。
- 8月16日（水）晴れ
- 2・4号住居址の掘り下げ。
- 1号住居址の掘り下げと、遺物取上げ。
- 7号住居址の写真撮影。
- 8月17日（木）晴れ
- 2号住居址の写真撮影。
- 3号住居址の掘り下げ。
- 湖東保育園園児見学。
- 8月18日（金）晴れ
- 2号住居址の平面図作成。
- 3号住居址の遺物取上げと、柱穴の掘り下げ。
- 4号住居址の掘り下げ。軽石製品出土。
- 8月21日（月）晴れ
- 3号住居址の柱穴の掘り下げと、遺物取上げ。
- 9号住居址の掘り下げ。
- 8月22日（火）曇り
- 5号住居址の掘り下げ。
- 3号住居址の平面図作成。
- 9号住居址の掘り下げ。
- 2・3号住居址間の、柱穴掘り下げ。
- 8月23日（水）晴れ
- 1号小豎穴の敷石をはずす。
- 3号住居址の清掃と写真撮影。
- 6号住居址の掘り下げ。
- 豎穴を伴わないピットの掘り下げを行う。その幾つかには柱底が検出されている。
- 湖東小学校探検クラブ見学。
- 8月24日（木）晴れ
- 5号住居址の完掘と、写真撮影。
- 6号住居址の掘り下げ。
- 住居址外で検出した、柱穴の掘り下げ。
- 1号小豎穴の埋甕炉の掘り下げ。
- 北部中学校生徒見学。1年2・3・4部、2年1部。
- 8月25日（金）晴れ
- 8号住居址周辺の柱穴の平面図作成。
- 9・10号住居址の写真撮影と、平面図作成。
- 5号住居址の平面図作成。
- 6号住居址の周溝と柱穴の掘り下げ。
- 5・6号住居址の間の柱穴の掘り下げ。
- 北部中学校生徒見学。1年1部、2年4部。
- 8月28日（月）晴れ
- 1号小豎穴の敷石除去後の写真撮影。6号住居址の柱穴掘り下げ。
- 9・10号住居址の平面図作成。
- 遺構外の柱穴掘り下げ。
- 8月29日（火）晴れ
- 6・8号住居址の清掃と写真撮影。
- 8月30日（水）晴れ
- 6号住居址の平面図作成。
- 12号住居址の柱穴の平面実測図作成。
- 9月1日（金）晴れ
- 3号住居址の写真撮影。遠景写真撮影。
- 9月4日（月）晴れ
- 機材の搬出を行う。

第II章 遺構と遺物

第1節 繩文時代

1 住居址

2号住居址（第4図、図版1-2）

F・G-3・4に位置する。平面形は東西に長い隅丸長方形を呈する。規模は、長径540cm、短径480cm、壁高25cmを測る。主軸方向はN-4°-Wを指す。南壁が旧校舎で搅乱を受けていたが、床面まではいたっていない。周溝は全周している。主柱穴はa-dの4本柱。奥壁のピット（e）は、本址に作うものと考えられる。炉は石団炉であったと思われるが、礫は抜き取られている。中央のやや北寄りに位置する。上下2層に分層される。

遺物は、入口と考えられる南壁付近に一括土器が出土している。出土した遺物は、全点をドットを落としながら掘り進めたが、掘り下げの段階では、破片の数は多いものの、一括となる遺物はなさそうであった。しかし、整理作業の段階でかなりの接合が確認でき、いくつかの器形を窺えるものとなった。

本址の時期は、出土した遺物から、縄文時代中期後半の曾利II式期に属すると考えられる。なお、この住居址は、8号住居址と重複しており、上層には8号住居址に属する縄文時代後期の遺物も見受けられる。

3号住居址（第5図、図版1-3）

H-1-3・4に位置する。昨年度の試掘調査で炉を検出していた住居址である。北壁際の調査ができなかつたが、円形を呈するものと思われる。規模は、長径640cm、短径620cm、壁高30cmを測る。主軸方向はN-2°-Eを指す。南壁際が旧校舎によって壊されていたが、床面まではいたっておらず、周溝は確認できている。周溝はほぼ全周している。10cmほどの浅い掘り込みの中に焼土が見られ、炉であることが分かるが、石団炉であったものと思われる。炉の南側にも床面の焼けている箇所があるが、古い地床炉が残っていたのであろう。覆土は上下2層に分層される。

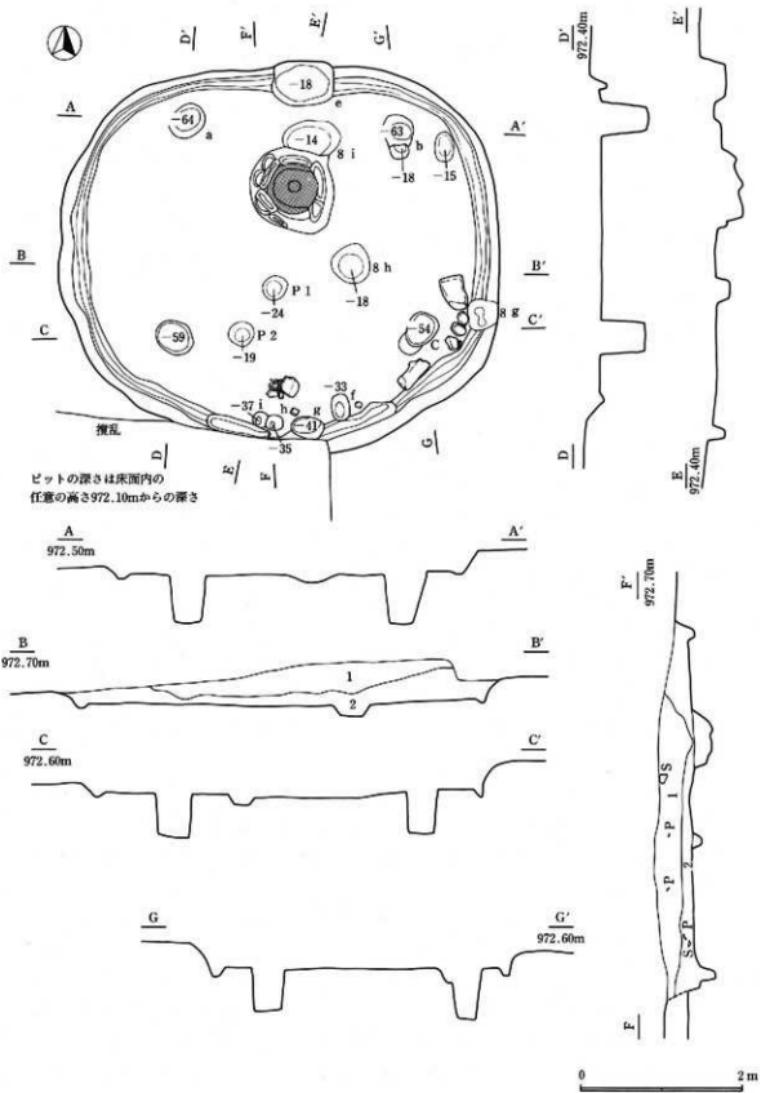
遺物は、住居址をA-Dに4分割し、さらに上・中・下層に分けて取上げて言ったが、中央からやや大きな土器片が出土しているが、完形にいたるものは少ないように思えた。しかし、整理作業の段階でかなりの接合が確認でき、いくつかの器形を窺えるものとなった。遺物の接合は、上・中・下層のものが接合する例も多い。また、石錐と軽石製の円板が各1点出土している。

本址の時期は、出土した遺物から、縄文時代中期後半の曾利II式期に属すると考えられる。

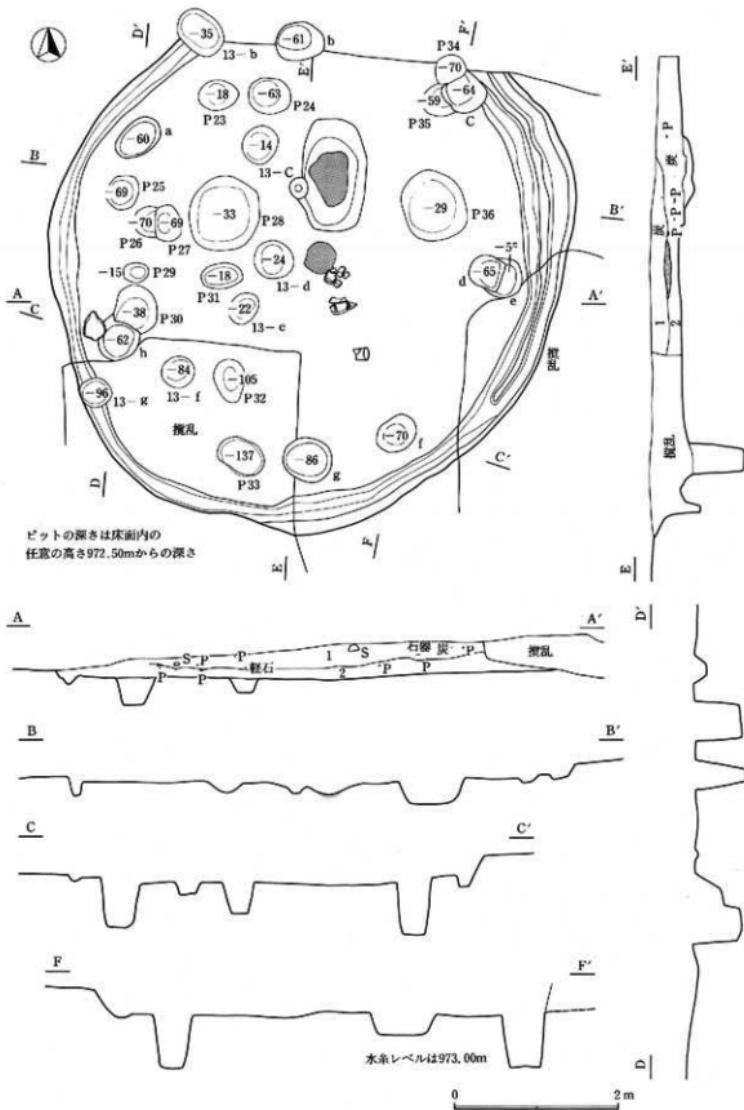
4号住居址（第6図、図版2-1）

I-J-3・4に位置する。南半が調査区外で、北側は旧校舎の基礎工事により削平されているため、平面形は不明であるが、ほぼ円形を呈していたものと思われる。規模は、短径450cm、壁高24cmを測る。壁は、東壁と西壁の一部を検出した。周溝は、西壁に沿って検出されているが、東壁側には認められない。柱穴は、炉の北東側に1本が検出されている。他に、炉の南側にも1本が検出されている。炉は石団炉であるが、礫は東側と南側に残っているだけで、他は抜き取られている。中央よりやや北寄りに位置していたものと思われる。

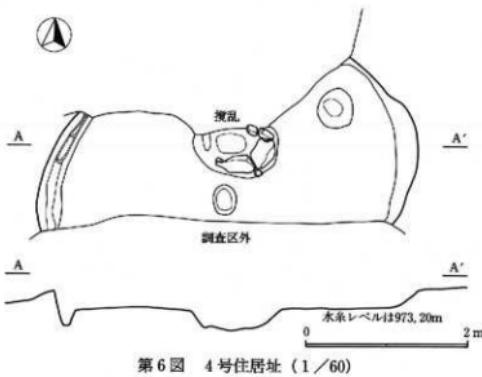
本址の時期は、出土した遺物から、縄文時代中期後半の曾利III式期に属すると考えられる。



第4図 2号住居址 (1/60)

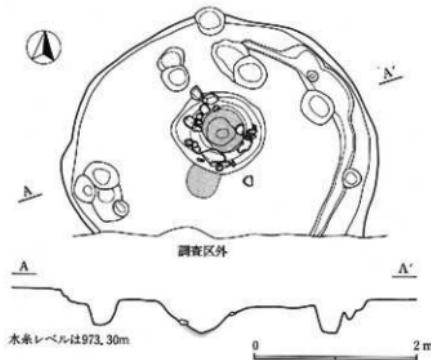


第5図 3号住居址 (1 / 60)



5号住居址 (第7図、図版2-2)

J-2・3に位置する。円形を呈する。規模は、長径370cm、短径350cm、壁高10cmを測る。主軸方向は、N-57°-Wを指す。床面は比較的平坦である。南壁側は調査区外。周溝は、東壁側には見られるが、西壁側では検出されていない。柱穴は、4本柱であったと考えられるが、南東側の柱は調査区外で検出されていない。炉は石囲炉であるが、礫は抜き取られ、間に詰めた小さな礫が残っているだけである。中央よりやや奥になると考えられる北東側に寄っている。



覆土は暗褐色土。粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。炉址内はよく締っている。小砾の他、黒曜石も多く混入する。

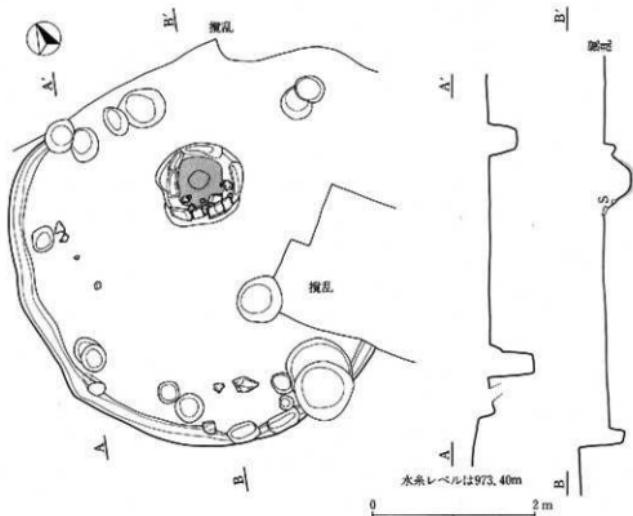
遺物はある程度まで器形を復元できたものは1点だけであるが、その他に軽石製の容器が出土している。

本址の時期は、中期後半の曾利田式期の中でも古い時期になるものと考えられる。

6号住居址（第8図、図版2-3）

K・L-3・4に位置する。平面形は、ほぼ円形になると思われるが、北東側は削平されている。規模は、長径480cm、壁高36cmを測る。主軸方向は、N-14°-Eを指す。床面は平坦であるが、東側に旧校舎の基礎が入っており、床面より下にまでいたっている。壁は、西・南壁を検出しただけである。東壁側は1号住居址と重複している。周溝は、検出された範囲内は全周している。北東・北西・南西の柱穴は、それぞれ重複している。新旧関係が確認できた北東ピットは東側（外側）が新しい。南側に入口に係わると考えられるピットが見られる。炉は石閉戸であるが、大きな砾は抜き取られている。中央より、やや北寄りに位置する。南東隅に見られる土坑の浅いものは、1号住居址に伴うと考えられる平安時代のものである。覆土は暗褐色土。深い土坑は縄文時代のものであるが、周溝より張り出しており、本址とは別の時期のものである。

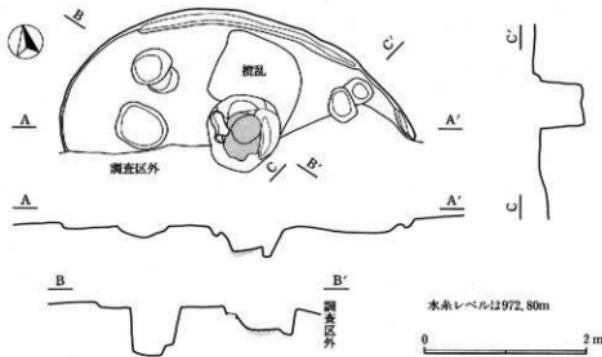
遺物は覆土がほとんど削平されてしまっていることもあって、器形を窺うことのできるものは出土していない。



第8図 6号住居址 (1/60)

7号住居址（第9図、図版3-1）

K・L-2・3に位置する。半分以上が調査区外にあり、全容は不明である。規模は、長径430cm、壁高6cmを測る。主軸方向は、N-20°-Eを指す。床面はかなり荒れており、平坦でない。壁は、ほとんど残っておらず、一部に見られる周溝により範囲がかろうじて推察できる。周溝は、北壁の東寄りに一部が検出されているだけで、全周していない。柱穴は2ヵ所で検出されている。2つずつ重複しており、内側が新しい。炉は石圓炉であるが、大きな礫は抜き取られている。



第9図 7号住居址 (1/60)

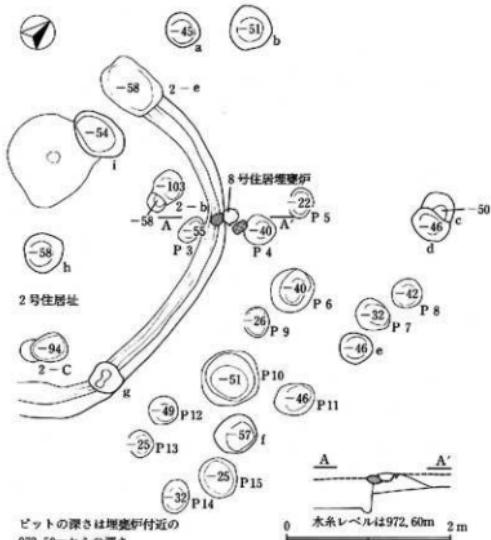
8号住居址（第10図、図版3-2）

G-4に位置する。埋甕がと柱穴を検出したため、住居址とした。平面形や規模は明らかでない。床面は遺構検出面より高い位置にあり、明らかにできないまま掘り進めてしまった。壁や周溝は検出できなかった。炉の周辺で検出されたa-iの9本が本址に係わる柱穴になると考えられる。炉は検出された柱穴のはば中央にある。埋甕が用いられた土器が繩文時代後期称名寺式期、2号住居址の上層で出土したものが堀ノ内I式期であることから、本址の時期もそれに近い時期になるものと考えられる。

9号住居址（第11図、図版3-3）

O・P-2・3に位置する。20cmほどの浅い表土層を取り除いたところ、炉石と炉の掘り込みが検出されたため、住居址であることが確認された。平面形態や規模は不明であるが、残された壁高は16cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、水道背の埋設等、旧校舎に係わる施設によって破壊されている箇所が多い。壁は、南壁を検出しただけである。周溝は、検出した南壁に沿って認められる。柱穴は、炉の周辺にいくつか検出されている。炉は石圓炉。南側に炉石が残存している。柱穴との位置から、やや住居址の北側に寄っていると考えられる。覆土は暗褐色土で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。ローム粒子・ロームブロックの混入が多い。炭化物も混じる。

遺物はほとんど出土しなかったが、炉の形態とその中から出土した土器から中期後半の曾利II式期になるものと考えられる。



第10図 8号住居址 (1/60)

10号住居址 (第11図、図版3-3)

O-2・3に位置する。9号住居址の柱穴を探す課程の中で、炉が検出されたため、住居址とした。旧舎や、それに伴う水道管の埋設により、床や壁面は確認できていない。周溝も未検出である。炉は石囲炉であったと考えられるが、礫は抜き取られており、小・中礫が残存するのみである。検出された柱穴もわずかで、炉が住居内のどの辺に位置していたのかも明らかでない。

遺物はほとんど出土しなかったが、炉の形態から中期後半の曾利期になるものと考えられる。

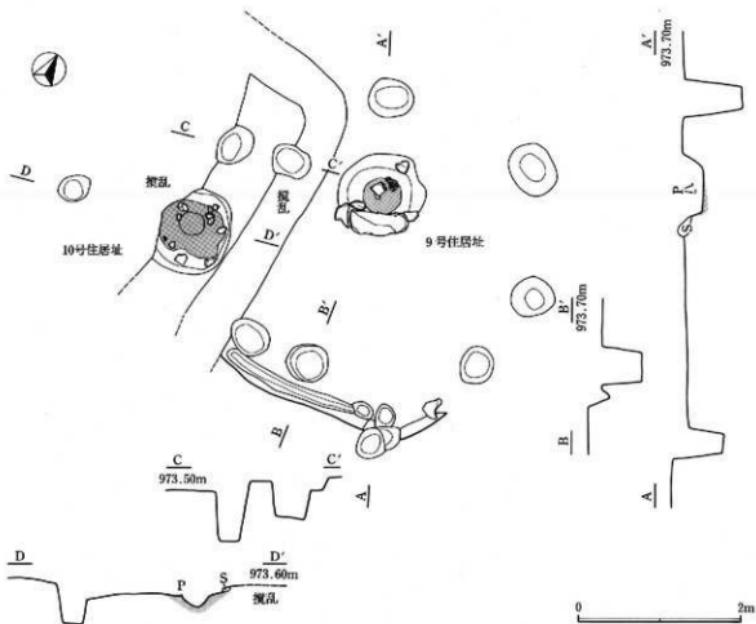
11号住居址

M-3に位置する。地床炉になるかと思われる焼土を検出したため住居址としたが、周辺を精査してもこれに伴うと考えられる柱穴を特定することはできなかった。したがって、平面形や規模は不明である。壁面や周溝も未検出である。周溝も検出できなかった。縄文時代後期に属する。

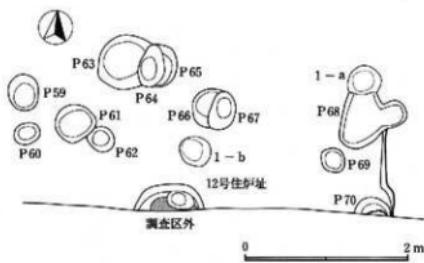
12号住居址 (第12図)

K・L-2・3に位置する。平安時代である1号住居址の床面下から炉が検出されたため、住居址とした。平面形や規模は明らかでない。壁は未検出である。柱穴は炉の周辺にいくつか検出されているが、特定できない。炉は石囲炉。南半は調査区外のため、全容は明らかでない。礫は抜き取られている。

遺物はほとんど出土しなかったが、炉の形態から中期後半の曾利期になるものと考えられる。



第11図 9・10号住居址 (1/60)



第12図 12号住居址 (1/60)

13号住居址 (第13図、図版4-1)

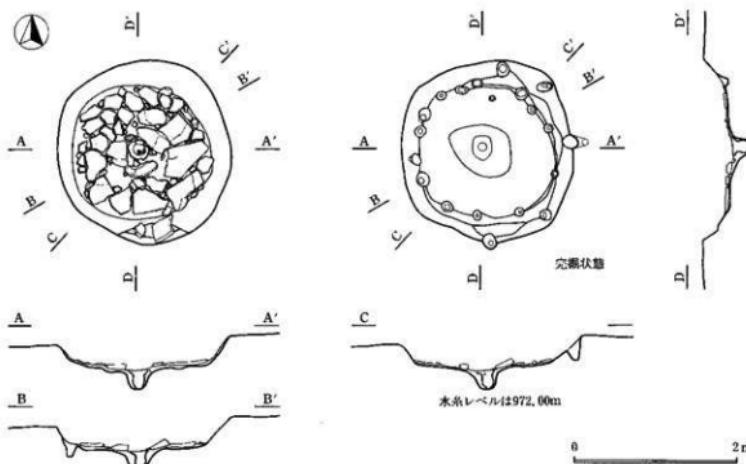
G・H・3・4に位置する。確認面としたローム面より上に床面があったと見られ、平面形や規模は不明である。壁や周溝も検出されなかった。a-Jの10本の柱穴が回っているため、住居址とした。3号住居址の覆土を掘り下げている途中で焼土を検出したが、掘り上げてしまい、位置は不明となってしまった。地床がであったと思われる。遺物は3号住居址の上層にわずかに混じっているだけである。



第13図 13号住居址 (1 / 60)

14号住居址 (第14図、図版 4-2・3)

C・D-2・3に位置する。平面形は、ほぼ円形を呈する。南側に張り出し部になるかと思われる段差があるが、明瞭でない。規模は、長径230cm、短径210cm、壁高26cmを測る。主軸方向は N 13°-W を指す。壁の一つ一つは床面と密着しているが、掘り込み面は凹凸が激しい。キメの細かい粘土質のロームを、床に敷い



第14図 14号住居址 (1 / 60)

た感じになっている。周溝は認められない。主柱穴となるような、大きなピットは検出されていない。小ピットが14本、床面の壁際を回っている。他に、東側の壁面に5本のピットが確認されている。炉は埋甕炉である。土器の周辺に敷き詰めた礫が、やや砾石に用いられたものと違う感じもするので、石開埋甕炉と言った方が適切かもしれない。上方の口縁部の脇に径5cmほどの礫があり、その下が焼けている。炉の位置は、ほぼ中央にある。黒褐色の單一層で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。微細なローム粒子が均一に入る。3~10mmのロームブロックが、稀に入る。また、3mmほどの炭化物が稀に入る。遺物は、確認面でかなりまとまって出土しているが、覆土内からの出土は少なく、埋甕炉に用いられた土器が唯一器形を窺えるものである。繩文時代後期壙ノ内I式期に属する。

2 土坑

本遺跡の調査の中で、土坑としたのは1基だけである。

1号土坑（第15図、図版5-1）

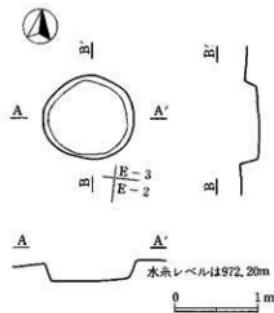
D-E-3に位置する。平面形はやや東西に長いが、ほぼ円形を呈する。規模は、長径110cm、短径103cm、深さ25cmを測る。

覆土は黒褐色土の單一層である。やや壁際の下層にローム粒子が多いが、分層は難しい。粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。全体にローム粒子の混入があるが、量は少ない。

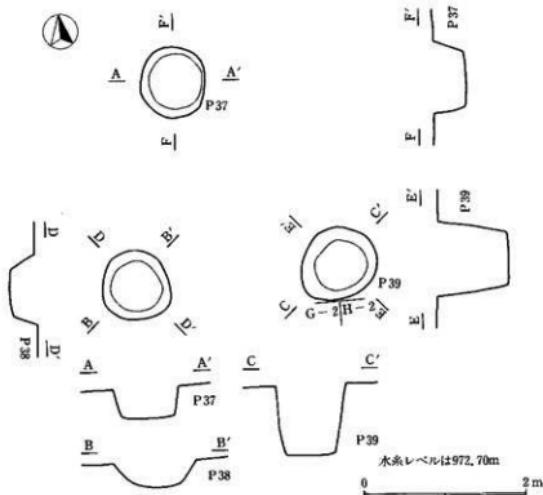
3 ピット

本遺跡では、ピットが多数検出されている（第16~20図）。そのほとんどは、住居址の柱穴とほぼ同規模のものであるが、中には、深さが1m以上あり、覆土の観察から柱痕と思われるものが検出されたものも、いくつか見られた。それらは、集中してみられるものの、建物址と断定するには、配列に規則性がないものであり、性格は不明とせざるを得ない。

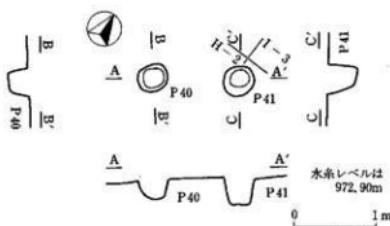
ピットの中で観察できた柱痕の共通点として、どれも北側に寄っていることだけ、記しておく。



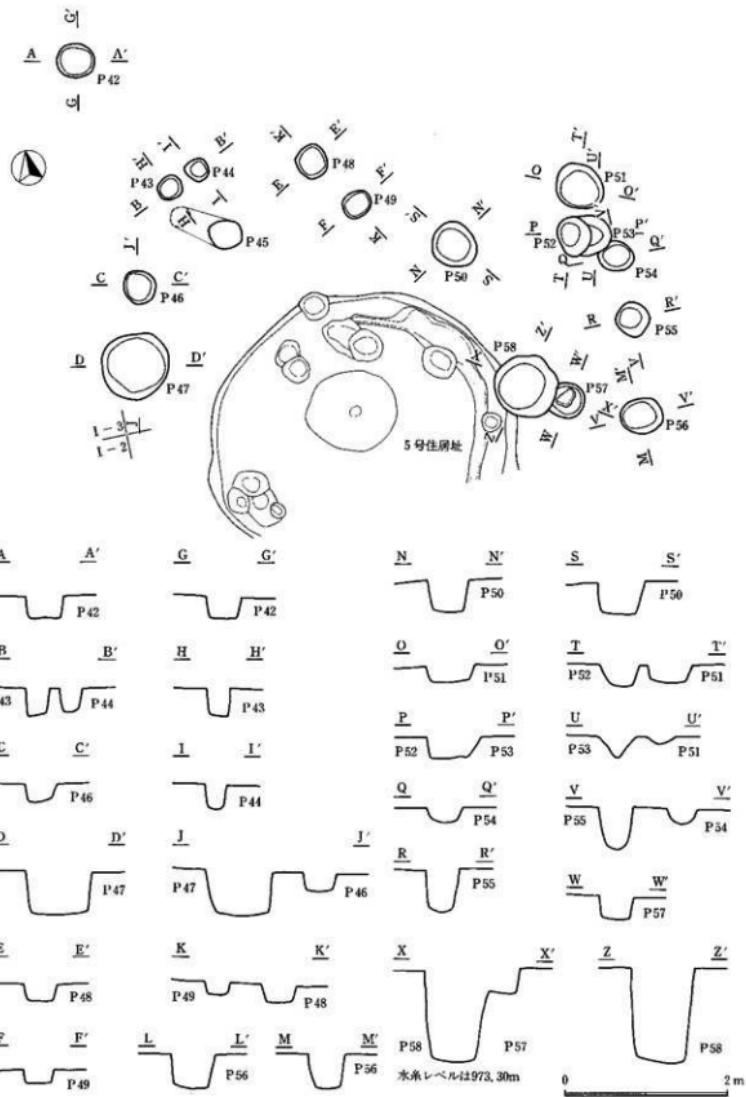
第15図 1号土坑 (1/60)



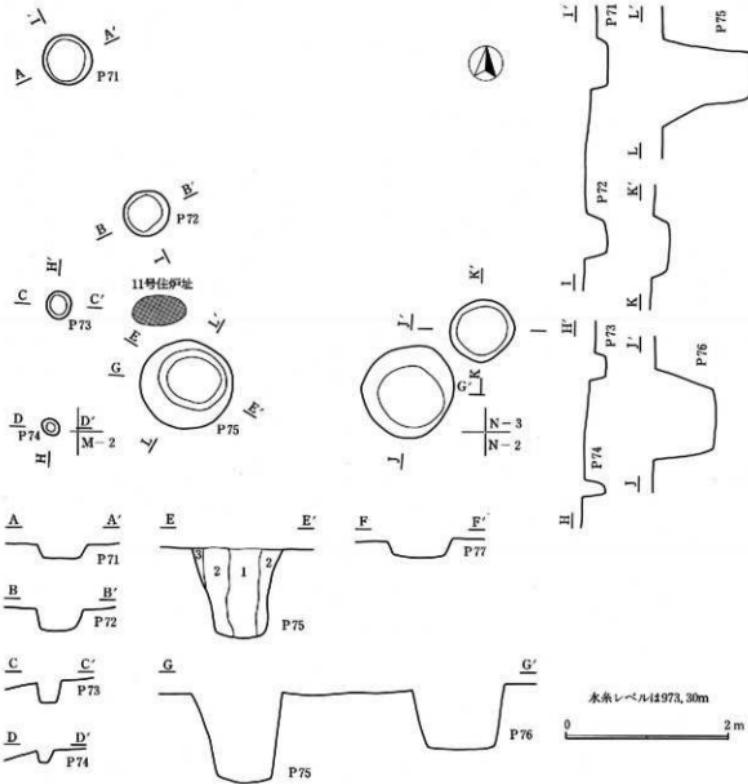
第16図 柱穴(1) (1/60)



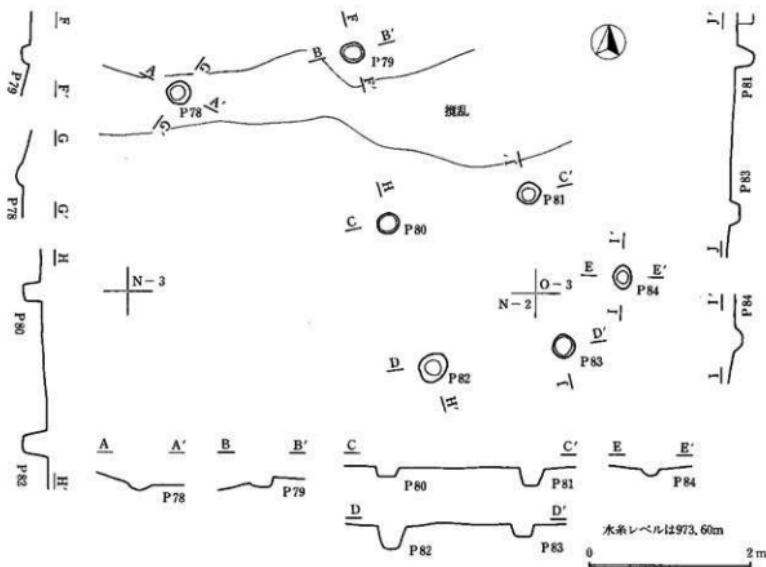
第17図 柱穴(2) (1/60)



第18図 柱穴(3) (1/60)



第19図 柱穴(4) (1 / 60)



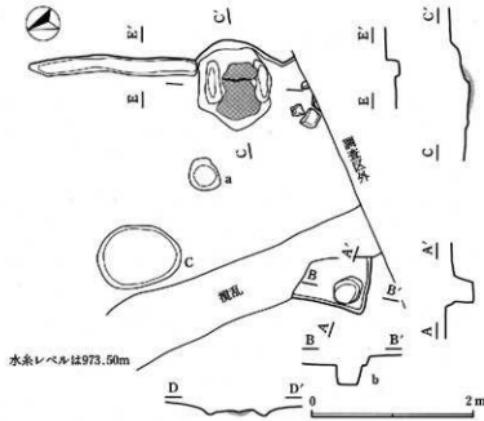
第20図 柱穴(5) (1/60)

第2節 平安時代

1号住居址 (第21図、図版5-3)

K・L-2・3に位置する。南側が調査区外で、さらに北側と西側が旧校舎の基礎工事によって壊されているため、全容は不明であるが、南北に長い長方形を呈するものと思われる。規模は、短径300cm、壁高11cmを測る。主軸方向はN-65°-Wを指す。確認面から床面までが浅いこともあって、床面近くにまで、砂利が混入している。壁はカマドの北側に一部残っている。柱穴は南西隅の1本が検出されただけである。他に2本が検出されている。カマドの前方やや北側に少ビット(b)が、西壁際やや北寄りに100×68cmの土坑(c)が検出されている。石組みの粘土カマドであったと考えられるが、礫は抜き取られている。カマドの南側の礫がかなり焼けているので、これがカマドに用いられたものであろう。東壁際のやや南側によったところにある。覆土は黒褐色土である。覆土が浅いにもかかわらず、土師器壺、黒色土器壺、灰釉陶器壺に器形を窺えるまでに復元できたものがある。北西隅にビットある。覆土は黒褐色土。

本址の時期は、平安時代に属する。



第21図 1号住居址 (1/60)

第III章 まとめ

今回、北部中学校が改築されることになった。かつての造成工事により遺跡はほぼ壊滅したと考えられていた新井下遺跡であるが、造成工事の方法によっては、縁辺部で遺跡の残っている可能性があること等を考慮し、昨年度、範囲確認をかねて試掘調査を行った。

試掘調査の結果、校舎敷地の東側から中央にかけては造成工事により破壊され、遺跡は残っていないことが確認されたが、西側から北側にかけては縁辺部に包含層が残っていることが確認された。特に北側では住居址や集石などの遺構も検出され、一昨年に調査した湖東保育園の敷地から続く大きな遺跡の一部であることが確認されている。

この結果をもとに、造成工事の設計に反映してもらうべく保護協議を行ってきたが、北側部分で、どうしても削平せねばならない箇所ができたため、やむを得ず、本年度発掘調査を行うことになった。

調査対象となったのは、遺跡の北側斜面にあたる約900m²である。

調査区の西側は、縄文時代後期の敷石住居や土坑が検出されたが、遺物の出土も少なく、遺構の分布も薄いことから、この辺りが新井下遺跡の北西端になるのではないかと思われる。調査が東に進むにしたがって、表土層中にも多くの遺物を包含するようになり、遺構の検出も増えていった。

縄文時代中期の住居址はローム層を掘り込んで検出されるため、遺構の検出は容易であった。しかし、縄文時代後期の住居址は、ローム層まで掘り込みが至っておらず、埋甕炉が黒色土中で検出されて、初めてその存在が確認されたり、柱穴が回っていることから住居址の存在を推測せざるを得ないなど、検出は容易ではなかった。また、東端ではローム面が削平されており、表土層を取り除くとただちに炉や柱穴が検出された。さらに、平安時代の住居址が上層で確認され、それと重複する形で縄文時代の住居址が存在していた箇所もあり、調査に手間取った。

今回の調査では、面積は少ないながらも、14軒の住居址と、多数のピットを検出することができた。また、新井下遺跡の広がりについても、北西端に達していると考えられ、国道299号線から続く、大きな遺跡であることが確認された。また、平成5年度に行われた湖東保育園の移転新築に伴う調査地点に隣接する箇所の調査であったが、どちらも北向きの斜面であり、今まで南斜面に多いとされる縄文時代集落の在り方を再検討させられる検出状況であった。

調査は前半の長雨にたたられながらも、ほぼ予定通り、終了することができた。

最終的な調査面積は、841m²であった。

おわりに

調査期間中、湖東小学校探検クラブがクラブ活動で、北部中学校の1・2年生が社会科の授業で、見学に来た他、幹線から外れているにもかかわらず、多くの市民が見学に訪れた。なかには、毎日の下向途中にのぞいていく小学生もいて、その熱心さにこちらの方が驚かされるほどであった。描い説明であったが、こうした経験を機に、彼ら・彼女らの多くが、将来考古学に興味を持ってもらえればと願う次第である。

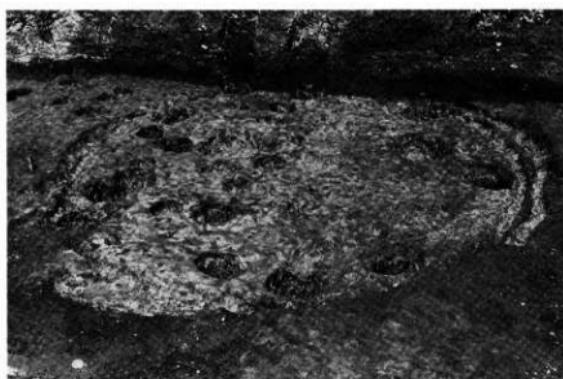
図 版



1. 道跡全景（西から）



2. 2号住居址（南から）

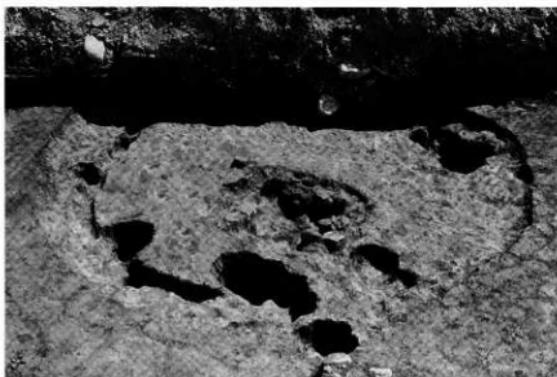


3. 3号住居址（南から）

図版 2



1.4号住居址（北から）



2.5号住居址（北から）



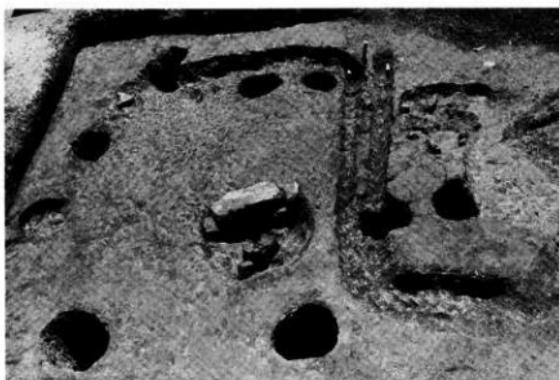
3.6号住居址（南から）



1. 7号住居址（北から）



2. 8号住居址（南から）

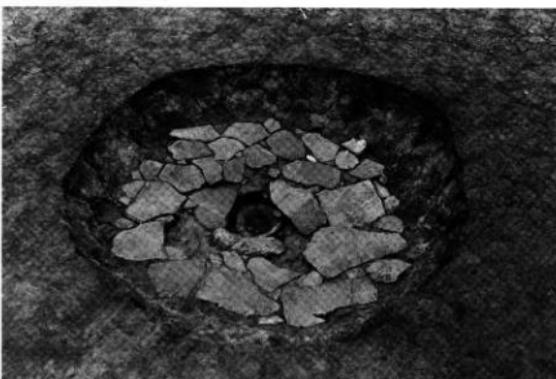


3. 9・10号住居址（北から）

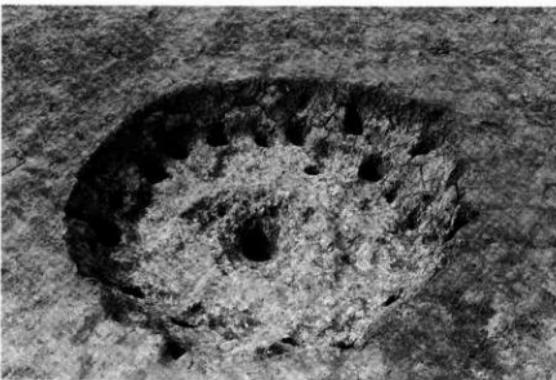
図版 4



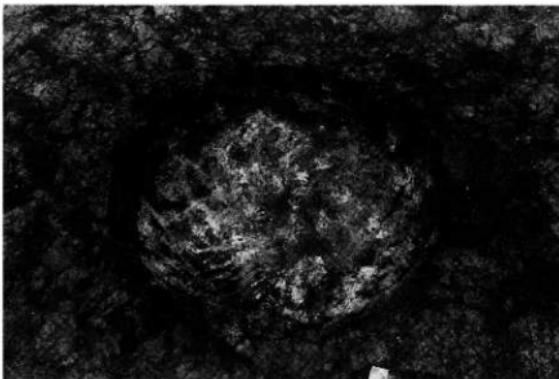
1. 13号住居址（南から）



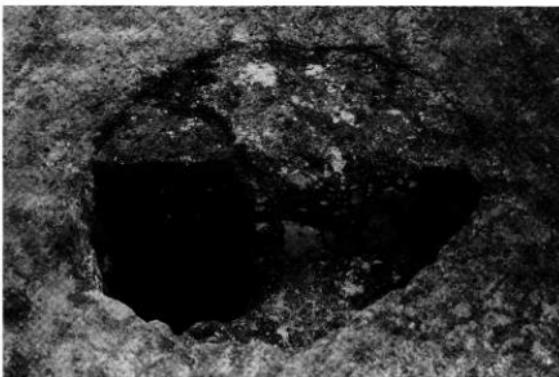
2. 14号住居址（南から）



3. 14号住居址完掘状態
(南から)



1. 1号土坑（南から）



2. ピット38（柱底）（西から）



3. 1号住居址（西から）

圖版 6



1, 2号住居址出土土器(1)



2, 2号住居址出土土器(2)



3, 3号住居址出土土器(1)



4, 3号住居址出土土器(2)



5, 3号住居址出土土器(3)



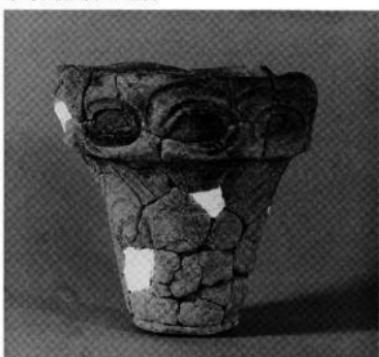
6, 3号住居址出土土器(4)



1. 3号住居址出土土器(5)



2. 3号住居址出土土器(6)



3. 4号住居址出土土器(1)



4. 4号住居址出土土器(2)



5. 4号住居址出土土器(3)



6. 5号住居址出土土器

図版 8



1. 8号住居址出土土器



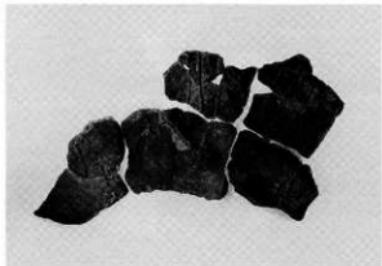
2. 8号住居址埋籠炉の土器



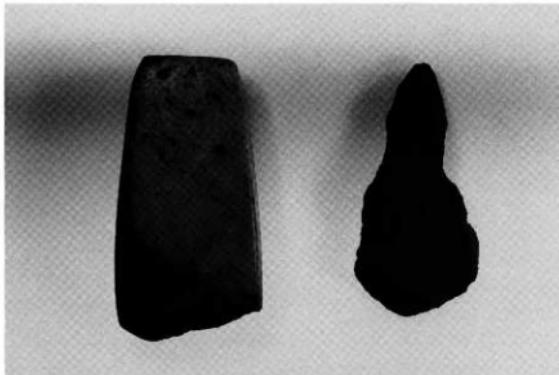
3. 9号住居址出土土器



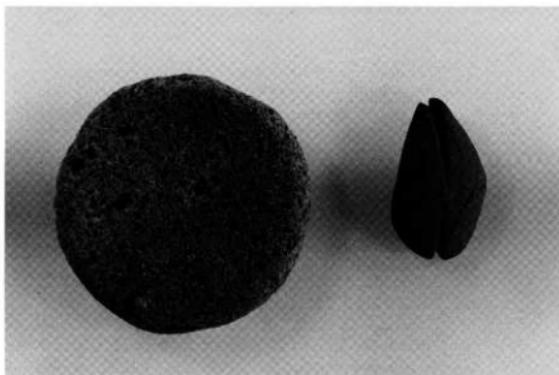
4. 14号住居址埋籠がの土器



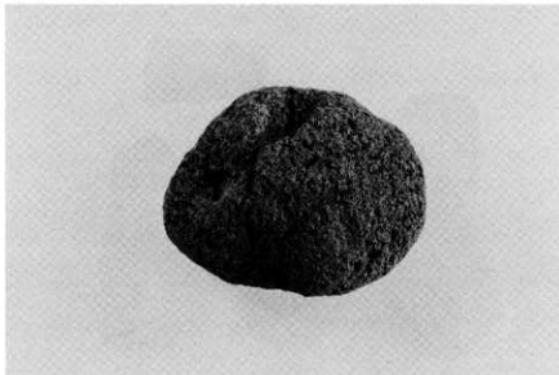
5. 造構外出土土器



1. 3号住居址磨製石斧
打製石斧



2. 3号住居址石鍤
鞋石製圓板

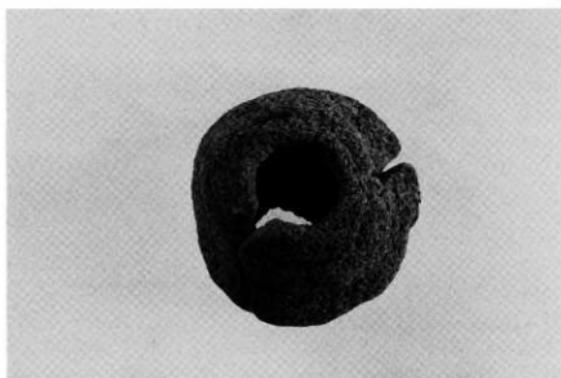


3. 3号住居址杵石

图版10



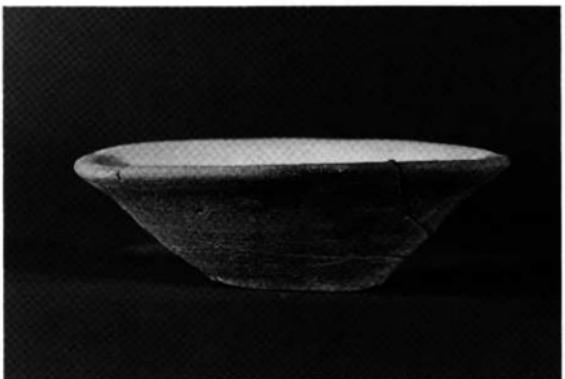
1.5号住居址輕石製容器



2.5号住居址輕石製容器
(上から)



3.9号住居址打製石斧と
横刃形石器



1. 1号住居址土器坯



2. 1号住居址黑色土器坯



3. 1号住居址灰陶器坯

報告書抄録

ふりがな	あらいしたいせき						
書名	新井下遺跡						
副書名	「北部中学校」改築工事に係る造成工事に伴う遺跡発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	小林 深志						
編集機関	茅野市教育委員会						
所在地	〒391 茅野市蓼原二丁目6番1号 Tel 0266-72-2101						
発行年月日	西暦1996年3月20日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
あらいした 新井下遺跡	ちのしこひがし 茅野市湖東 5,643	20214	59 1' 30"	36° 12° 0"	138° 7月3日～ 9月1日	841m ²	「北部中学校」改築工事に伴う遺跡調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
新井下遺跡	集落跡	绳文時代中期 ・後期 平安時代	住居址 14軒 土坑 1基 ピット多数 住居址 1軒	縄文土器 石器 灰釉陶器 土師器			

新井下遺跡

—「北部中学校」改築工事に係る造成
工事に伴う遺跡発掘調査報告書—

平成8年3月17日 印刷

平成8年3月20日 発行

編集 長野県茅野市塚原2丁目6番地1号
発行 茅野市教育委員会

印刷 日本ハイコム株式会社

